

## 聖書に学ぶ

—— 創世記に見る人類太古の物語の現代的意義 ——

月 本 昭 男

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました月本昭男と申します。

この藤女子大で、一昨年、そして今年度と、集中講義をさせていただいておりますが、これに合わせて今回講演せよということで、北海道で初めて、このような公開講演をさせていただくことになりました。

### 聖書学に進む

最初に少し自己紹介をさせていただければと思います。私は1948年生まれで、ちょうど団塊の世代であります。高校の頃まで、ファンダメンタルなプロテスタントのですね、非常に原理主義に近いところの教会にありまして、聖書に書かれていることは、一字一句間違いないと、そういうふうに信じておりました。ならば学問的にも証明されるはずだと、単純に思いまして、キリスト教、特に聖書の勉強をしたいとの思いで、大学に入りました。まずは新約聖書から勉強を始めておりました。しかし、ご存知のように、丁度、私が大学に入りまして二学年のときから、日本全国を大学紛争の嵐が吹き荒れました。

田舎の高校生が大学に入ったばかりで、社会意識も政治意識もなかったのですけれど、いったい何が問題なのかということで、いろんなグループの集まりにも出てみたり、耳を傾けたりしていく中でですね、それまで思っていたことがだんだんと崩れてまいりまして、果ては、いったい神様は存在するのだろうか、といった疑いまで抱くようになりました。そして、神様を信じない方が楽に生きられるんじゃないかと、そんなふうにまで思った時期もありました。

その中で最後に、またもう一度信仰に、聖書の信仰に戻らされましたのは、自然によってでありました。春先に、不名誉な名前のオオイヌノフグリという花がありますね、紫のごく小さい花です。その花をなにげなく見ましたら、小さい花なのに、実に端正にできているんですよ。それで、ああこんな小さな植物も、こんなに美しくできているんだと思ひましてね。これが偶然にできたということはありません、やはりそこに神様の意志が働いているはずだと、そういうふうに分なりに納得させられました。それで、本当は神など信じない方が楽な人生を生きられるんじゃないかと思ひながらもですね、また信仰を与えられ、聖書の勉強も少しずつ進め始めたのであります。

しかし、大きな曲がり角がいくつかありました。一つは、四年生になって、卒業後どうするかという決断に立たされたときです。自分の気持ちとしては、大学院に進んで聖書の勉強をしたいと思っておりました。新約聖書を本当に理解するためには、旧約聖書も理解しなければならないと思ひて、ヘブライ語なども勉強しはじめていたのです。しかしその大学紛争の中で、一体学問にはどういう意味があるのかと、学生たちは先生方に非常に鋭く問いかけたわけですね。鋭角的に問うたと思いますね。中にはごまかす先生もいましたけれど、非常に誠実な数学の先生が、俺は数学が好きなんだ、なんで悪いんだと、逆に学生にくってかかるような先生もいました。しかしいずれにしてもあの時代、学問の意義、意味というものが鋭く問われました。

私はキリスト教系の寮にいましたが、その寮の学生たちも多くはヘルメットを被って、角棒を持ってですね、大学構内で氣勢を上げていたのです。私は、聖書の勉強、とくに旧約聖書に関心を持っておりましたが、旧約聖書は今からもう二千五百年以上も前に書かれたもので、しかも日本はキリスト教国ではありませんし、地理的にもずっと離れたところですから、その聖書を研究することにどういう意味があるのかと、当時の学生としても自問せざるを得ませんでした。寮のある友人に相談しました。ヘルメットをかぶって角棒をふるっていた友人ですけれど、キリスト教にもかかわりをもっていた男で、すでに某大銀行に就職を決めていた友人です。寮に帰ってきますと、ギターをつまびいてフォークソングを歌っている、そういう男でした。

「聖書を研究してみたいのだけれど、どう思う？ 聖書の研究はもう、百五十年、二百年もの歴史がヨーロッパにはあって、聖書のどの一節をとっても研究論文がいくつも出てくる。非常に細かな、重箱の隅をつつくような学問になるだけけどねえ」と言いますと、彼は「そうだよなあ、聖書の研究なんて……」と、しばらく考えていましたが、そのうち、「月本、重箱の隅だっていいじゃないか、つついてみるよ」って言うのですよ。「重箱の隅だって、つつきつづけければ、そこに小さな針の穴のようなものが開くかもしれない。その小さな穴でも、目をずうっと近づけたら、そこから人間が見えてくるかもしれないし、今の社会というのが見えてくるかもしれない。いつの時代も人間は人間だよ、どこに住もうと人間は人間だよ」。こう言うのですよ。私は、内心では聖書の研究をしてみたいと思っておりましたから、その通りだ、自信をもって重箱の隅をつつき続けられればいいのだと、そんな風に自分なりに思いまして、大学院に進むことを決心したのでした。

その友人に、十数年あとだと思いますが、そのことを話したら、覚えていないのですね。「俺も学生の頃はけっこういいことを言ったもんだな」なんて言うのですね。私にとっては本当に大きな、決断のきっかけを与えてもらった友人の言葉でしたが、彼自身はそれを覚えていないのですから、証明の手段がないのですけれども、それがまた私たちの人生について、ある一つのヒントを与えてくれました。

私たちの人生を大きく変えるようなきっかけ、あるいは歴史を変えるようなきっかけは、決して新聞に大きな活字で出るような、そういう出来事では必ずしもないのだ、と。誰も知らないようなちょっとしたことが、本当に大きな、人生を変えてくれるきっかけになる、そういうことがあるのだということも教えられたのです。

## 聖書学、聖書考古学、古代オリエント学

いずれにしましてもそういうことで、私は大学院に進んで、まずは旧約聖書の勉強から始めました。そして、三、四年たってからでしょうか。イスラエルに派遣されておりました日本の発掘調査団が1964年から、1966年にかけて発掘の調査をしてから、8年ほどのブランクの後、1974

年に発掘を再開することになりました。私は大学院の学生でしたが、月本は、おつむはそんなには良くなさそうだが、体だけは健康そうで発掘調査向きだというので、私は初めて 1974 年にイスラエルに連れて行っていただいて、発掘調査に従事したのでありました。これがまことに印象的でした。

今回は発掘調査のお話はあんまり詳しくは申し上げませんが、イスラエルだけではなく、西アジアですね、今大変な状況になっているシリア、イラクなどの遺跡はですね、乾燥地帯で、水が少ないところですから、水を確保できるところでないと人が住めません。したがって、町が建てられる場所は限られている。そこで、同じ場所に人々は何千年も住み続けるわけです。そうしますと、住居跡がだんだんだんだん高くなりまして、丘になります。それを発掘しますと、新しい時代から古い時代へと、何層にも何十層にも、住居層が重なっていることがわかります。

これは日本における発掘調査と違うんですね。日本では、たまたま工事現場から遺跡が出て来てしまったなんてことがありますでしょう。西アジアには、そんなことはないのです。はじめからここには遺跡があると分かっている。西アジアは広いので、そのような遺跡は数えきれないほどあるわけです。もちろん、それらの遺跡のすべてが発掘調査されているわけではありませんが、調査は、遺跡の形から、この辺が町に入る城門ではあるまいか、というような予測をつけながら発掘調査をします。しかし予測をしても、必ずしも予測通りに出てくるわけではありません。発掘調査というのは意外性の魅力があるんですね。これが素晴らしいと思いました。

何よりも、発掘調査は戸外で体を使いますでしょう。あ、先ほど申し上げたことを、誤解なさらないでください。考古学者は体だけで、頭を使わなくていいと申し上げたわけじゃありません。考古学は、遺跡の発掘調査のために体も使うし、もう一方で、それがどういう意味を持つかを考察するデスクワークもある。ですから体も使うし頭も使います。それに意外性という面白さが加わります。このような考古学こそは理想的で、素晴らしい学問ではないのかと思ったのです。そこで、私は旧約聖書をしながらも、考古学を中心に研究したいと思ったのです。ところが、

1974年といえますと、世界規模で石油危機が起こる時代でありまして、発掘調査はその年で終わり、継続されなかった。次の年からは中断してしまいました。

その後、たまたまドイツに留学する機会がありまして、75年からドイツに参りました。ドイツに留学するときに私の先生が、「月本君、旧約聖書の研究なら日本でもできるよ。旧約聖書の原典があって、参考書があれば十分なのだから。せっかくドイツに行くのだから、日本ではできないことをやってきたらどうだ」と忠告してくださいました。「旧約聖書の背景になる古代西アジア、メソポタミアなどの楔形文字の世界、これを勉強してきたら、あとになって役立つよ」などとも言われたのです。私は単純ですから、そうかもしれない、と思って、ドイツに留学しています六年ほど、旧約聖書の研究と並行させながら、楔形文書を資料とする古代オリエント学に足を踏み込んだのです。

日本に戻りまして、立教大学に職を与えられてからは、神様に、四十歳までは楔形文字の研究もさせて下さい、四十歳になったら旧約聖書に集中します、と誓った。ところが、いざ四十歳になっても、まだ足が洗えなかった。で、五十歳までお願いします、と。しかし、それでもまだ足が洗えなかった。六十歳を過ぎても、まだ楔形文字の世界と格闘しています。今ではもう、神様に誓うことはせずに、もう少しばかり楔形文字の資料を扱わせてくださいとお願いしています。そんなわけで、一番の関心は旧約聖書ですけども、もう一方では楔形文字資料の研究に携わっています。それに加えて、1990年からは、再びイスラエルで、日本隊の発掘調査が再開されましたので、それに関係しています。要するに私は旧約聖書学、聖書考古学、古代オリエント学という三足の草鞋を履いてまいりました。したがって、あぶはちとらずの感は否めませんけれども、それでも、考古学や、古代西アジアのことを少しく勉強してきましたので、他の旧約聖書の研究者にはない視点なども与えられたかな、とも勝手に思い込んでおります。

## 古代オリエント学から見た旧約聖書の訳語問題

本日の講演題には「人類太古の物語」とありますように、旧約聖書の

創世記の最初の方を少し素材にしながら、お話をさせていただきますので、しばらくご辛抱いただければ、と思います。

まずは、私が楔形文字の世界に少しふれることによって、聖書について少しく見方が変わった点からはじめます。創世記の二章の十二節をご覧ください。

エデンの園からは四つの川が流れ出したと書いてありますね。ピションとギホンとチグリス川とユーフラテス川。その最初の、ピションとギホンはどこの川か、必ずしもはっきりしないのですが、クシュの地を流れるギホンは、ナイル川が念頭におかれているかもしれません。クシュとはエチオピアないし上エジプトを指すからです。ピションの方は、その流域で良質の金と「ブドラク」と「ショーハム」が産出するといえます。この「ブドラク」と「ショーハム」は何なのか。これもよく分からないのです。

「ブドラク」は、そのまま音訳した聖書もあります。中には、「ブドラク香」あるいは「ブドラクの樹脂」などとも訳されます。カトリック、プロテスタント、聖公会などの協力のもと、1987年に刊行された新共同訳聖書は、現在、最も広く使われていますが、ここでは「琥珀の類」と訳されています。しかし、「ブドラク」はこの楔形文字文書に、ブドゥルクという語形で出てきます。香りのある樹脂らしいのです。ですから「琥珀」ではありません。そもそも琥珀は西アジアでは採れませんから、楔形文書をはじめ古代西アジアの文献に出ることはありません。琥珀の産地は、西方では、バルト海沿岸でした。「琥珀」という訳は、こうした文化史をふまえていないことになります。

では「ショーハム」はどうでしょう。これはまったく意味が分からない単語です。伝統的には「縞瑪瑙」などと訳されてきました。新共同訳はこれに「ラピス・ラズリ」という訳語をあてました。ラピス・ラズリはご存知でしょうか。紺色の、宝石というには、少々硬度の低い貴石です。このラピス・ラズリを古代オリエントの人たちはなぜか非常に好んだのです。群青色が魅力的だったのでしょうか。しかも、西アジアにおけるラピス・ラズリの産地は一か所しかありません。アフガニスタン奥地、中国との国境地帯のフンザの里です。古代オリエントの人々はこの石を好みましたから、メソポタミアでもエジプトでも、なんとかこれを

手に入れようとしてしました。ですから、絹の道ならぬ「ラピス・ラズリの道」と呼ばれる交易路があったのです。ですから、旧約聖書にラピス・ラズリが登場してもおかしくはないのですけれど、ピション川の場合は、金の産地といえますから、アラビア半島などを念頭に入れているらしいのです。とすると、ラピス・ラズリという訳は文化史的には正確ではありません。

ところで、古代メソポタミアの人たちは、このラピス・ラズリを人工的に作ろうとしました。紀元前一五〇〇年頃のことです。ラピス・ラズリを人工的に作ろうとして、結果的に、ガラス製作が発達しました。では、ラピス・ラズリは旧約聖書に出てこないのかといいますと、「サファイア」と訳されるサッピールというヘブライ語がじつはラピス・ラズリであった、と考えられるのです。

要するに、「ショーハム」の意味は正確には分からないのですが、もしこれがバビロニアやアッシリアでサームという単語と関連するとしますと、サームは「赤」という意味ですから、ラピス・ラズリとは色も一致しないことになりましょうか。

文化史と関わる訳語について、エゼキエル書から二つばかり拾ってみましょう。四章の二節にカルという言葉が出てきます。城壁を崩す器具で kar と綴ります。これについても、「城崩し」「城壁崩し」「破城槌」など、文語聖書から最も新しいフランシスコ会訳聖書まで種々の訳がみられます。カトリックのバルバロ訳は「撞角」です。これはなかなか見事な訳語なのです。残念なことは、日本語として、「撞角」といわれても、意味が通じないことです。じつは、ヘブライ語のカルは「牡羊」を意味します。なぜ牡羊かといいますと、城壁崩しに使った器具の形態と関係があるのです。資料としてお配りしたアッシリア軍によるラキシユ攻略図の中央に車状のものが描かれていますね。これがカルです。防御用の覆いをつけて、城壁に向かって進んでいます。その前には大きな鎗のようなものが出ています。これが、角に見立てられ、牡羊と呼ばれるようになったのです。その尖った部分を城壁に突き刺し、城壁を崩そうとしたのです。

そうしますと、槌ではないので、新共同訳の「破城槌」というのは正しくないことになります。大きな丸太状の槌もヨーロッパで、あるいは



日本でも、城壁崩しに使ったはずですけど、西アジアの城壁崩しは槌ではなかったのです。車の前につけた角状の大槍で城壁を崩したのです。ですから、「城壁崩し」あたりが適切な訳語ではないかと思いますが、バルバロ訳の「撞角」は「突いて崩す角」という意味でしょうから、この訳に私は驚かされました。訳者のバルバロは、ヘブライ語のカルがどういう形態のものか、知っていたのですね、きっと。しかし、残念なことに、バルバロ訳は引き継がれませんでした。

もう一つ、エゼキエル書の十六章の十節に出るメシーという単語について指摘させてください。このヘブライ語も、正確な意味は分からないのですが、文語訳以来ほとんど「絹」と訳されてきました。新共同訳でも「絹」という訳が踏襲されています。しかし、シルクロードで有名な絹は、中国産です。西方世界に絹はないものだから、絹の交易路ができたわけですね。ところが、その絹がエゼキエル書に言及されているとなれば、文化史的に関心を持っている人は、エゼキエルの時代、中国の絹がイスラエルに来ていたのか、などといった誤解が生じかねません。

メシーは上質の織物ですが、どういう素材であったのかはわかりません。少なくとも、絹でないことだけは確かです。関根正雄訳では「にぎたえ」です。しかし、「にぎたえ」は、「撞角」と同様、若い世代には分かりませんね。岩波版旧約聖書では「細布」という訳が当てられています。いずれにしても、「絹」は不適切な訳語です。絹が旧約聖書に出るということは、文化史的にありえないからです。

このように、私は古代オリエント学を学ぶ中で、旧約聖書の文化史的背景などにも関心が向くようになりました。本日は詳しく立ち入りませんが、旧約聖書の洪水物語などは、ほぼ同じ物語が、楔型文字資料のなかにいくつも伝えられております。

## 旧約聖書の創造物語と古事記の国生み神話

ここまで、あらずもがなのことを申しましたが、ここから、創世記の一章から十一章までに記されている人類太古の物語について、二点ほどにテーマを絞ってご紹介させていただきます。一点は自然観、もう一点は人間観です。



私が大学院で勉強し始めてからしばらくしてから、創世記の一章の天地創造物語と古事記が物語る「国生み」神話を比較してみせた人がいました。聖書学者ではありません。日本の文学者でもありません。政治思想史を専門にしていた、丸山真男です。

聖書と古事記の比較など思いもよりませんでしたから、私はこの比較に非常に驚きました。かたや創世記は、まず神が光あれと言うと、光があった。そして、六日で天地万物を創造し、最後に人間の創造が語られます。かたや古事記の物語は、伊邪那岐・伊邪那美が「天つ御柱」を回り、まずは伊邪那美が、なんてあなたはいい男なの、と言い、お前もいい女だな、と言って両者が合体して、「国生み」をしていくのですね。はじめは、しかし、伊邪那美の方が先に言ったので、生まれたのは蛭子だった。それで、天つ神々に相談すると、案の定、女性から先に言うてはいけない、と言われます。そこで、あらためて御柱を回って、今度は伊邪那岐の方から、「あなにやし、えをとめを」と言い、伊邪那美が「あなにやし、えをのこを」と答えて、四国や九州の国々を次々と生んでゆく物語です。聖書の天地創造物語とこのような国生み神話は比較するにはあまりにも違いすぎています。

丸山がこれらをどのように比較したかといいますと、物語そのものではなく、そこに使われる基本的な動詞を比較したのです。日本の場合には、「国生み」神話と呼ぶように、「ウム」という動詞、それから「ナル」という動詞が繰り返されます。それに対して、創世記の創造物語では、はじめに神は天と地を創造されたというように「創造する」つまり「ツクル」という動詞が基本なのですね。

「ツクル」とは人為的であり、意志的な行為を表します。「ウム」とか「ナル」は、それに対して、自然のプロセスです。時期がくれば花が咲き、実を結んで実が「ナル」のであり、動物は発情の季節がくれば交尾して次の世代を「ウム」のです。

丸山真男の論文は、この比較に主眼を置いたものではありません。日本人の歴史意識というのはどういうことか、という視点から両者を比較したのです。つまり、民族の歴史観がその民族が伝える世界の始まりを物語る神話の中に見て取れるとすれば、日本人の意識の底を流れる歴史観は古事記のような神話にあらわれているだろう。それを明らかにする

ために、丸山は創世記の物語と比較してみせたのです。

そして、次のように論じました。日本人は世界の成り立ちを「ナル」という自然のプロセスとして受けとめ、歴史もまた川の流れのように自然の「ナリユキ」として受けとめてきた。川の流れは急流もあれば、よどみもある。しかし、それは自然の「ナリユキ」以外ではありえない。他方、世界は「ツクラレタ」ものである、という神話が伝わる世界では、もし、世界が滞ってしまえば、それは「ツクリ」変えることができるし、そうしなければならない、そういう発想が生まれるにちがいない。それが社会変革の思想や革命思想が生まれる素地になりうる。しかし、世界を「ナル」といった自然のプロセスと考える社会では、歴史もまた、楽観的には、なんとか「ナル」と、悲観的には「ナル」ようにしかならないと受けとめられてしまう。そこから社会を自ら変革するという態度は生まれにくいにちがいない。丸山真男はそうした点を指摘したかったのではないか。そう私は読み取りました。その意味では、丸山は「ツクル」を基調とする創世記の天地創造物語に一定の価値を置いていたのかもしれない、と思います。

創世記の天地創造物語をこのような視点で読むということは、神学者も聖書学者もしてきませんでした。私は、その点で、神学者や聖書学者にはない天地創造物語の読み方を丸山真男から学びました。もっとも、創世記の天地創造物語と古事記の「国生み」神話の間には、丸山真男が指摘しなかった重要な点があります。創世記には天地万物と人類の創造が物語られますが、「国生み」神話が物語るのはあくまでも日本の国土の成立であって、そこに世界や人類という視点は見られません。

## 旧約聖書の「人間中心主義」

ところで、1980年代、創世記の天地創造の物語は批判の対象にもなりました。その先鋒に立ったのは梅原猛氏でした。彼はおよそ次のような批判を新聞などに寄せています。今日、人類が直面しているもっとも焦眉の急を要する問題は、地球規模で起こっている自然破壊であり、環境汚染である。いったい、なぜ、こういうことになったのか。過度の産業の発達、工業の発達、自然開発がその直接的な原因ではあるけれども、

その背後には、人間の生活の便利さ、快適さのためには、自然を利用するだけではなくて、利用し尽くしても構わない、という人間中心主義的な発想がある。そして、この人間中心主義思想は西欧のキリスト教的人間観に発するのだ、と批判したのです。

彼は天地創造物語を引用したわけではありませんが、このような批判はわたしたちに創世記の一章の二十六節を思い起こさせます。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」（新共同訳）

神はこうして自分の姿に似せて人間を創造し、さらに言います。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

天地創造物語のこうした一節は、明らかに、人間を世界の頂点に位置づけ、自然の支配者とみなします。こういう発想が人間中心主義につながり、自然を利用し尽くしても構わないという発想を生み出す。今日の世界規模、地球規模での自然破壊の思想的な元凶は、このようなキリスト教の人間中心主義である。東洋の伝統的自然観はそうではない。自然と人間の調和と融合、これに最も高い精神的境地を認めてきた。梅原氏が語っているわけではありませんが、例えば竹林の七賢人。彼らは、竹林において、竹は木であるのか、木とは別の植物なのか、竹の節は何のためか、などといった議論はしません。むしろ、竹林にそよぐ風のなかで、自然と自分たちを一体化させようとする。そこに東洋の最も高い精神的境地があり、知恵があった。

東西の自然観の違いは、庭園の造り方などにも見てとれます。ヨーロッパの庭園は、だいたいにおいて幾何学的になっている。直線や円を用いて左右対称にし、池には噴水を置く場合が多い。きわめて人工的です。かたや日本の庭園、これは自然そのものを映そうとする。日本庭園に噴水はありません。自然な水の流れを用います。それでも足りなかったら、背景にある山まで庭の一部に取り込もうとします。これを借景というのだそうです。たしかに、自然に関する伝統は東洋と西洋のキリスト教圏では異なります。

私が大学で聖書を教え始めた 1980 年代はじめ、このような梅原猛氏の

キリスト教批判に出会いました。その点に目をつぶって、聖書の思想を論ずることはできなかったのです。私自身が氏から大きな問題を提起されたと受けとめました。梅原猛氏にお会いできる機会があったら、感謝したいと思うほどです。

その人間中心主義を巡って私は思いをめぐらすとともに、人間と自然という観点から、聖書を読み直しました。それが大学で聖書を教え始めたころの私の大きな課題となったのです。その点につき、二つのことを指摘させていただきたいと思います。

### 東洋的自然観の脆弱性、大地の僕としての人間

その一つは、次のようなことでした。梅原猛氏の主張は私なりによく理解できました。キリスト教的な人間中心主義ではなく、東洋的な自然観に、人間と自然の調和という思想に帰れという氏の主張もよく分かりました。賛成もします。しかし、次のことはどう考えたらよいのか。次のこととは、日本が欧米の科学技術を取り入れて、富国強兵に向かう明治から百五十年の間に、氏の言う東洋的自然観は日本人の間からほとんど消えてしまったということです。私は若き日にヨーロッパに留学し、大学に職を得てからも、研究休暇をいただいて欧米で数年を過ごし、欧米の学生たちと接する機会がありましたが、そこで感じたことの一つは、今日の環境問題、自然破壊の問題に関して、日本の学生たちもよりも、欧米の学生たちの方がはるかに敏感だということでした。日本の学生たちは自然にじつに冷淡です。いったいどうしてそうなってしまったのか。

あるいはもっと具体的に、日本の公害第一号とされる足尾鉍毒事件のときですが、伝統的な日本の宗教者たちはそれを批判したのでしょうか。足尾鉍毒事件を激烈な言葉で批判した宗教者といえば、この札幌にできた農学校で学び、キリスト教徒となった内村鑑三ではなかったでしょうか。彼は、人間の欲望が、自然を破壊するだけではなくて、そこに住む人々の命をむしばんでいるということを洞察し、激烈な言葉でこれを批判しました。足尾銅山の社主古河市兵衛を名指して批判しました。日本の伝統的な、自然との融合を大切にしてきた仏教の指導者たちは、あの時点で、ほとんど発言していません。東洋の、人間と自然とが融合する

思想は、どうしてそんなにもろくも崩れてしまったのでしょうか。そうした思想自体に脆弱な面があったのではありませんか。

もう一つは、梅原氏が指摘する人間中心主義は、聖書の自然観の一面に過ぎないということです。たしかに創世記一章は人間を自然の支配者として位置づけています。しかし、それは聖書の自然と人間観の一面です。もう一面があります。その点を見据えなければなりません。

梅原氏の問題提起を正面から受け止めた私は、旧約聖書における自然観を自分なりに真剣に問いただすなかで、いくつかのことを発見しました。そのひとつは、創世記の二章五節の言葉です。新共同訳で「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった」と訳されている箇所です。じつは、ここで「土を耕す」の「耕す」という動詞のヘブライ語はアーバドですが、この動詞は、辞書を引きますと、最初に出てくる意味は「仕える」なのです。英語では to serve です。Servant 「仕える人、僕」のもとの動詞です。また「土」のヘブライ語はアダマーですが、私は「大地」と訳すのがよいと思います。岩波委員会訳の創世記では「神ヤハウェが地に雨を降らせず、大地に仕える人が存在していなかったからである」と訳されています。つまり、ここでは人間が「大地に仕える」存在であると言われているのです。

創世記は第一章で、大地を、つまり自然を支配する存在として描きますが、第二章では、その人間が大地に仕える存在である、というのです。しかし、このことは、ほとんど二千年以上のあいだ、気づかれずにきました。というのも、アーバドという動詞がギリシャ語さらにラテン語に訳されたときに、「耕す」という動詞が用いられたからです。そしてそれが他の国語にも踏襲されたのです。しかし、「耕す」と訳された原語は「仕える」という動詞だったのです。「奴隷」ないし「僕」と訳されるヘブライ語はエベドですが、エベドの動詞がアーバドなのです。ですから、人間は大地に「僕として仕える」存在だということです。

このように、旧約聖書はその冒頭で、一方で、人間を自然の主、自然の支配者と位置づけ、他方で、大地に仕える存在とみなすのです。矛盾と言えば、矛盾ですが、ここに人間と自然の両義的な関係が述べられていることになります。大地の支配者は、大地に仕える者である。聖書を

よくご存じの方は、「支配者」が「僕」であると聞いて、「上に立つ者は仕える者のようではなければならない」と語ったイエスの言葉を思い起こされるに違いありません。このことに気づいたとき、私はとても驚かされたのです。もし、梅原氏の問題提起がなければ、このことに気づかずに、この箇所ではアーバドを「耕す」と訳すのだ、と納得していたかもしれません。じつは、ヘブライ語には耕作行為を意味する「耕す」という動詞は別にあるのです。ヘブライ語を学んでおられる方もいらっしゃるでしょう、と思って申しますと、ハーラシュという動詞がそれです。しかし、その動詞はここに用いられてはいないのです。

## 原初史に見る人間と自然

そうなりますと、創世記一章から十一章までの、多分に神話的な色彩の濃い物語群は、どうも自然と人間の関係を視野に入れているらしい、ということが想像されます。実際、そうした観点から読んでみますと、たしかにそのとおりなのです。

三章十四節以下では、食べてはいけないといった木の実をとって食べる最初の男女が、エデンの園から追放される前に、まず蛇に、次に妻に、そして最後にアダムに神からの言葉が告げられますが、十七節で神はアダムにこう告げます。「お前のゆえに、土は呪われるものとなった」(新共同訳)。岩波委員会訳では「大地はあなたのゆえに呪われる」と訳されています。「お前／あなた」とはアダムのことです。しかも、最初の人間の名前アダムとは「人間」という意味です。「土／大地」とは自然と言い換えることもできます。そもそも旧約聖書には自然という単語はありません。「地」や「大地」という単語を自然という意味で用いたのです。ですから、この神の言葉は「人間のゆえに大地が呪われる」と読めます。

次の四章の、カインとアベルの物語を見ますと、ここでも、カインが弟アベルを殺害しますと、神からの叱責があり、処罰が下されます。その中で神はこう言います。「今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる」(新共同訳)。ここでも、「土よりも」と訳された句は「大地よりも」と訳せます。つまり、弟を殺害したカインは、土を耕しても、言い換えれば、大地に

仕えても、大地は「もはやお前のために作物を産み出すことはない」というのです。この「大地よりも」という句には、三種類の訳の可能性があります。岩波委員会訳では「大地によって」と訳されます。カインは弟を殺害したがゆえに、大地から呪われる、という意味です。新共同訳の「土よりも」とは、土が呪われた以上に、という意味です。口語訳聖書では、カインは呪われて大地「から」追放される、という意味に解されています。これは、「…より」とか「…から」と訳される前置詞が、比較にも、起因を表す場合にも、分離を表す場合にも用いられるからです。ここでは、したがって、大地よりももっと人間が呪われるとも、呪われて大地から遠ざけられるとも、あるいは大地によって呪われるとも、三様に訳されうることになります。そのどれが正しいのか、と客観的に言うことはできません。どの訳が正しいとは言えませんが、ここに人間と大地、つまり人間と自然の関係が言い表されていることだけは、明らかです。

そして最後は、洪水物語です。神が地上を見ると、人間は常に悪いことばかり心に抱いて、悪を行っていた。そこで神は、人間を創ったことを深く後悔し、人間を拭い去る決断をした。いや、人間だけでなく、動物たちもすべて滅ぼしてしまおう、と言います。そして地上に洪水を起こすという物語になっています。

ところで、神が後悔するなんて、神らしくない、と感じる方もおられましょか。学生たちにこれを問うと、後悔する神は神ではない、という答えが多く返ってきます。どうでしょうか。私はむしろ、後悔する神に重要な意味が込められていると思います。聖書の神は後悔する神なのです。そこで、最近、「神の後悔」を主題とするドイツ語の書物が翻訳されました。

旧約聖書には、神が自分の行為を後悔した、と直接的に物語る箇所として、洪水物語のほかに、王政移行に際して、サウルを王に選んだことを後悔する場面があります。最初の王として選ばれたサウルは、今日の言え、精神的に非常に不安定になって、悪霊にとりつかれます。すると、新しい王を立てて、このサウルを退ける、と神は言います。そのときに、サウルを王につけたことを神は後悔したというのです。

洪水物語において、人間が地上に悪を蔓延させているさまを見て、神



は人間を創ったことを後悔した。神らしくないのですけれど、そこに旧約聖書の神の特質が表されています。人間がおのれを見つめるとき、おのれの醜さが見えてくる。自分自身が罪人であることが迫ってくる。そうした認識に立つとき、神はこのような自分を創造したことを後悔しているにちがいない、といった思いにとらわれる。そういう意味で、神の後悔には、おのれの罪の深い認識が表明されているわけではありませんか。

いずれにしても、神が後悔したのは、人間が地上に悪を蔓延させたからです。動物が、ではありません。もっとも、それに続いて、多くの聖書には、「地は墮落した」などという訳文が加わりますので、あたかも動物の世界まで墮落したかのような印象を受けます。しかし、「墮落した」という訳は必ずしも正しくありません。むしろ、人間が悪をはびこらせることによって、地は「破壊された」のです。自然の墮落ではなく、人間の悪による自然の破壊です。この点は、後で、預言書などを引いて、少し詳しく見ることになります。

かくして、洪水が起きますが、ノアとその家族は、箱舟によって救われます。また、すべての動物の種が箱舟で救われます。洪水は一年間も続きますが、洪水が終わり、ノアが放った鳩がオリーブの若葉をくわえてきます。そこから、洪水後の新しい世界が始まる。そういう物語になっています。

洪水が終わり、地が乾きますと、ノアは箱舟から出て、神に犠牲をささげます。そして、創世記八章二十一節には、次のように書かれています。お手元の資料に代表的な日本語聖書の訳文を掲げました。文語訳には「我、再び人のゆえによりて地を呪うことをせじ」とあり、ほかに「私はもはや二度と、人のゆえに地を呪わない」「私はこれからもう、人間のゆえに地を呪うことはすまい」「私はけして再び人のゆえにこの地を呪うことはすまい」などがありますが、新共同訳は「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」と訳しました。

この新共同訳が出ましたとき、私はこの箇所を見て驚きました。というより、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」という訳文のなかの「人に対して」という句が日本語として、すぐには理解できなかったのです。それ以外の聖書の「人のゆえに」であれば分かります。洪水により大地が呪われたが、それは人間の悪のゆえであった、という意味で

すから。つまり、人間の悪のゆえに大地が呪われたことを洪水物語は語っていることになります。ところが、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」とはどういう意味なのか。おそらく、新共同訳聖書はこの箇所を次のように理解しているのではないのでしょうか。すなわち、大洪水は、罪をおかした人間に対する処罰として下されたのである、と。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」とは、洪水をそう理解した結果なのであろう、と私は思わされたのです。それ以外に考えつかなかったのです。

「人のゆえに」と「人に対して」。訳文上はごくわずかな違いです。しかし、洪水物語について、ここには本質的に異なる物語理解が反映されています。「人のゆえに」の方は、洪水によって大地が呪われたのは人間の悪のゆえであった、という理解ですけれど、「人に対して」の方は、大地が呪われることになった洪水は人間の悪を処罰する神の手段として理解しているからです。この違いは微妙ですけれど、洪水物語の理解という点では、本質的に異なります。「地／大地」つまり自然の側から見れば、前者は人間の悪の巻き添えになったことになります。それに対して、後者の場合、自然が人間の悪を処罰する手段になったと理解されます。

どちらの理解が正しいのでしょうか。まず、「人のゆえに」あるいは「人に対して」と訳された前置詞句ですが、これにはバアブルというヘブライ語の複合前置詞が用いられています。それはすでに三章の十七節で見ました「お前のゆえに」と訳された前置詞句と同一の前置詞です。この前置詞は基本的に、原因、理由を表します。ですから、三章の十七節では、新共同訳も「お前に対して」ではなく、おまえの「ゆえに」と訳しています。ならば、八章二十一節でも、同様に訳すべきでした。ところが、洪水物語においては、「人に対して」と訳したのです。ですから、言語のうえでも、「人に対して」という訳は自然ではありません。

## 地は嘆き悲しみ

「人のゆえに」との関連で、人間の悪のゆえに大地が嘆き悲しみ、動物・植物が絶滅の危機に瀕する、という表現が預言書に繰り返されるということも指摘されねばなりません。実は、梅原猛氏の発言をきっかけにし

て、旧約聖書の自然観を調べる中で、私はこのことに気づかされたのです。

お手元の資料には三か所だけ掲げておきました。まずイザヤ書の二十四章の四節から五節です。新共同訳で「地は乾き、衰え、世界は枯れ、衰える。地の最も高貴な民も弱り果てる。地はそこに住む者のゆえに汚される。彼らが律法を犯し、掟を破り、永遠の契約を棄てたからだ」と訳されている箇所です。人間が律法を犯したために、自然が枯渇し、大地が汚される、というのですね。人間が律法を守らなかったために、大地が衰え、苦しんでいる、というのです。「乾き」と訳された動詞は、別の訳では、「嘆き悲しみ」と訳されています。

次にエレミヤ書十二章四節。ここも新共同訳で読んでみましょう。「いつまで、この地は乾き、野の青草もすべて枯れたままなのか。そこに住む者らの悪が鳥や獣を絶やしてしまった」。内容的には、説明の必要はないでしょう。人間の悪が自然を絶滅の危機に追いやってしまう、というのです。ここでも「乾き」は「嘆き悲しみ」と訳せます。

最後はホセア書四章の一節から三節です。一節には、神ヤハウェが「この国の住民を告発される」と記され、「この国には、誠実さも慈しみも神を知ることもないからだ」とその理由が続きます。真実と慈愛と神を知ること、つまり神への畏れが欠如している、という糾弾です。続く二節には、その結果、社会が乱れていることが指摘されます。「呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫がはびこり、流血に流血が続いている」。人権が軽んじられ、男女関係が乱れ、人命が軽んじられている。

預言者の批判としては、ここまですで十分なのですが、それに「それゆえ」とはじまる三節が加わります。「それゆえ、この地は渇き、そこに住む者は皆、衰え果て、野の獣も空の鳥も海の魚までも一掃される」と。後にパウロは、最後まで存続するものは「信仰と希望と愛である」と語りましたが、預言者ホセアは「真実と慈愛と神への畏れ」が人間にとって最も重要な要件である、というのですね。これらが欠如すると、社会が乱れる。いや、社会が乱れるだけでなく、自然までも絶滅の危機に瀕してしまう。ホセアはそう指摘したのです。

これに類した言葉はまだほかにも見ることができますが、これら三箇所から、人間の悪のゆえに自然が滅亡の危機に瀕しているという預言者

の指摘は十分にお分かりいただけたと思います。

もっとも、預言者の時代は今から二千五百年以上も昔です。そのころに自然破壊なんてあったのか、と疑問をもたれた方もいらっしゃるかもしれませんが。月本の解釈は現代的観点からの読み込みではないのか、と思われた方もいらっしゃるでしょうか。

## 古代における自然破壊

実は、当時すでに自然破壊が起こっていました。『ギルガメシュ叙事詩』という楔形文字で伝えられた物語をご存知でしょうか。旧約聖書よりもはるかに古い物語です。この物語のなかに、主人公ギルガメシュは友人エンキドゥと「杉の森」の怪物フンババを退治に出かけるエピソードがあります。この「杉の森」はレバノン杉の生い茂るレバノンの山ですから、メソポタミアのウルクという町から西に向かいます。ところが、この物語の古いシュメル語版では、ギルガメシュとエンキドゥは東に向かうのです。東とはイランです。ところが、物語伝承は、紀元前一八〇〇年以降、遠征先を西に変えています。その背景には、メソポタミアから東方の山に森林が消滅したことを暗示しています。そこで、はるかに遠い西のレバノン山脈まで遠征する物語になりました。しかも、良質の木材を求めて、メソポタミアの王たちもエジプトのファラオもレバノンに向かいます。そのために、香り高いレバノン杉の森は消滅の一途をたどるのです。

あるいは、旧約聖書に登場する様々な動物のなかで、ライオンや熊やダチョウなどの大型の動物はもはやかの地には生息していません。それらは人間が絶滅させたのです。象は紀元前八〇〇年頃までオロンテス川流域の沼沢地帯に生息していましたが、象牙目当ての乱獲により消滅しました。象牙細工で財をなしたのがフェニキア人たちでした。旧約聖書にも「象牙の家」とか「象牙の寝台」という表現があります。もちろん、象牙製の家とか寝台という意味ではありません。象牙細工で飾った部屋や寝台のことです。

ライオンとは言えば、アッシリアやペルシャの王が権威を示すためにライオン狩りを行ったのです。そのために、すでに古代にその数は少な

なっていました。そこでライオンを飼育し、これを放ってライオン狩りをしたのです。ダニエル書には、ダニエルがライオンの洞穴に落とされる物語が見られますが、その洞窟はライオン狩りのための飼育場所だったのですね。

二〇一〇年、私が団長を務めたイスラエルの発掘調査で出た獣骨のなかに熊の指の骨が二点ほど発見されました。旧約聖書にも熊が登場しますので、発見されても不思議ではないのですが、実際にそれを手に取ってみて、ある種の感懐が沸き上がりました。熊が生きていくためには森が必要です。しかし、もうずいぶん前から、熊が生きて行ける森はかの地にありません。パレスチナの海岸平野部分には、さらに古くは、河馬がいたことも分かっています。鱶も棲息していました。しかし、これらの動物は絶滅して久しいのです。絶滅させたのは、ほかならぬ人間です。遺跡からは、ダチョウの卵の殻が出土することもあります。ダチョウの卵は殻が厚いので、装飾品として珍重されたのです。そのためにダチョウも絶滅しました。

先ほど読みました預言書の三箇所には、そうした事態が洞察されているのではないかと私には思えるのです。エレミヤ書は「人間の悪が鳥や獣を絶やしてしまった」と、イザヤ書は「地が汚されてしまった」と表現しました。

私は旧約聖書と並んで楔形文字資料を読んできました。また、多くは翻訳を通してですが、古代ギリシア文献などにも親しみ、多少は古代エジプト文献などにも目を通しました。これらは、分量から言ったら、聖書をはるかにしのぎます。文学的に見ても、ギリシア悲劇の多くは聖書よりはるかにすぐれています。哲学的考察という点では、聖書はプラトンやアリストテレスの作品の足元にも及びません。しかし、それらのすぐれた作品の中に、すくなくとも私の見る限り、人間の悪のゆえに自然が嘆き苦しむ、といった洞察はありません。自然が滅亡の危機に瀕している、といった指摘も見ることできません。洪水物語は古代メソポタミアの文献に見られます。しかし、人間の悪のゆえに「地が呪われる」といった視点をそこに見ることはできません。

では、旧約聖書にこうした洞察が残されたのはなぜでしょうか。それは旧約聖書の創造思想と深く関係している、と私は思います。自然は神

によって創られ、よしとされた。そう信じた者たちのなかに、その自然が破壊され、衰えてゆくことは神による創造の秩序と関わる事態として受けとめる眼差しが養われたのではないでしょうか。抽象的な創造神学ではなく、この世界は神によって創造されたという信仰のはたらきがここにありました。

このように、創世記一章から洪水物語にいたる物語群には、人間と自然ということが視野に入れられている、ということは、お分かりいただけたのではないかと思います。

### 「神の似姿」としての人間

余分なお話をしたからでしょうか、時間がわずかになってしまいました。残る時間で原初史が描き出す人間観に触れてみたいと思います。

聖書の人間観と言えば、人間は「神の似姿」として創造された、という箇所が重要です。この「神の似姿」については、神学者たちがさまざまに議論してきました。ウェスターマンという学者が書いた創世記の詳しい注解書には、これまでの議論が大きく六つにまとめられ、さらにその他の様々な解釈が加えられています。「神の似姿」とは、人間が精神をもった存在であることを示す、人間は神と向き合う存在として創造された、といった説明が並びます。それらのどれも、少なくとも私にとって、すっと胸に収まるような説明ではありません。間違っている、というわけではありませんが、では、なぜそれを「神の似姿」と表現したのか、という説明になっていないのです。

そうした中で、驚かされた解説に、モーセの十戒には「神の像」すなわち偶像を造ることを禁じているが、神自身が「自らに似せて」人間を造ったというからには、十戒を破っているのではないか、という問題提起はユニークでした。

いずれにしても、神学的議論はいきおい難しくなります。ところが、メソポタミアの資料を見て、気づかされることがありました。というのも、メソポタミアの文献資料のなかに、「神の似姿」と呼ばれる人物が登場するからです。それは誰かと言いますと、王です。王に宛てた手紙に、「神の似姿なる王よ」とか、「太陽神の似姿なる王よ」といった呼びかけ

が用いられます。しかも、その「似姿」というバビロニア語は創世記のそれと同じなのです。ヘブライ語でツェレム、バビロニア語ではツアルムといいます。母音はわずかに違いますが、同じ単語です。ですから、もし、創世記の人間創造の物語を書いた人たちが、メソポタミアでは王が「神の似姿」と言われていたことを知っていたら、それを念頭においていたのではないのでしょうか。エジプトでは、王ファラオは「神の似姿」であるどころか、神とみなされていました。

そうした事実を念頭において、人間は「神の似姿」として創造された、と記したのだとすれば、この物語の主張は明確ですね。王が「神の似姿」なのではない、人は誰しも、男も女も、「神の似姿」なのだ、と創世記の物語は主張していることになりませんか。それは王権批判とも読めます。また、人間の平等の宣言である、といってよいのでしょうか。王を「神の似姿」と呼ぶ古代西アジアの文献にふれた私は、創世記の人間創造の記事には、このような主張が籠められているに違いない、と思わされてきました。

## 名前を呼ぶ

創世記は二章になりますと、より詳しい人間創造の物語がつづられます。人間が「地の塵から」形づくられます。「塵」とはゴミではありません。ゴミではなく、大地の粒子の細かい土、粘土です。粘土で人間は創られ、アダム、正確にはアーダームと呼ばれます。アダムとは、すでに申しましたが、ヘブライ語では「人間」を意味します。しかも、これは特殊な単語で、複数形も女性形ありません。つまり、男も女も、個人も集団も、子供も老人も、すべてアダムなのです。アダムはあらゆる人類を意味します。

ですから、この物語は神が最初に造った人間が男性なのか、女性なのか、はっきりしないのです。後に、アダムの肋骨から女性が造られるので、最初の人間が男性であった、とわかるのですね。かつて、哲学者サルトルと連れ添ったボーヴォワールは、『第二の性』という有名な本の冒頭部分で、女は女に生まれるのではない、女は女になるのだ、と記したそうですが、最初の人間は、あばら骨から造られた女と出会ってはじめ



て男になった、ということです。

ともあれ、最初に造られた人間はエデンの園に連れて行かれます。この物語は、ゆっくり読むと、実に色々のことを教えてくれます。その一つは、「人が一人にいるのはよくない」という神の発言です。ここには聖書の基本的な人間観が語り出されています。ギリシア人ならば、「人間は社会的な生き物である」と言うのでしょうか。哲学者ならば、「人はそれ自身で人であるのではない、人は他者との関係性において人となる」などと言うのでしょうか。しかし、聖書は同じことをもっと平易に「人が一人にいるのはよくない」と神は語ったと伝えるのです。

そこで神は最初の人間のパートナーを造ろうとされた。まずは動物です。すると、最初の人間アダムはその動物に一つずつ名前をつけた、と記されています。これも重要なことです。一章では、神は光を造って「昼と呼んだ」、天空を作って「大空と呼んだ」と記されてゆきますが、神も名前をつけたのです。二章では人間が名前をつける。この「名前を呼ぶ」ということは実に重要なことです。

私が旧約聖書を勉強し始めたころ、ある先生から「名前を呼ぶ」とは支配・被支配の関係である、と聞かされました。しかし、それが事柄のごくごく小さな一面にしか過ぎないことを知るのに、そんなに時間はかかりませんでした。「名前を呼ぶ」「名づける」ということは、支配・被支配の関係ではなく、重要な創造行為です。そのことを学ばせてくれたのは、ポール・トゥルニエという、スイスの医師が書いた本でした。

トゥルニエ医師のところに、十七歳だったと思いますが、レイプで身ごもった女性が相談に来た。堕胎をしたい、という相談です。敬虔なクリスチャンでもあったトゥルニエ先生は、堕胎には反対でしたが、この女性の場合は別でした。レイプによって身ごもったのですから、父親が誰かも分からない。また、経済的にも自立できていない。母親になるにはまだ精神的な成熟度も足りないと思われる。そこで、堕胎やむなしと判断せざるを得なかった。ところが、彼女の診察室から出るときに、トゥルニエ先生は、ふと、次のように尋ねたというのです。「もし、万が一、お腹の子供を産むとしたら、どういう名前を付けるでしょうね」。すると、その女性は出口のところにしばらく佇んでいたかと思うと、「先生、私はこの子供を産みます」ときっぱり答えたというのです。

私はこの文章を読みまして、驚くとともに、「名前をつける」という行為は、生命を生かす行為であり、創造の業の一部なのだ、と教えられたのでした。

その後も、名前を呼ぶということについて、いろいろと学ばされる経験をしました。比較的最近では、沖縄の摩文仁の丘の「平和の礎」での体験です。ご存知の方も多いと存じますが、沖縄本島の一番南の平和公園、摩文仁の丘に「平和の礎」という、沖縄戦で亡くなった二十数万人の人たちの名前が丹念に刻まれた記念碑があります。沖縄の民間人犠牲者のほかに、県別に戦死した日本軍兵士、さらに米軍兵士、また、沖縄戦で命を落とした中国人と朝鮮人、これらの人たち二十数万人の名が刻まれた石碑が並んでいます。私の知っている人は誰一人いないのに、胸に迫ってきます。私はこれらの石碑にいたく心を打たれました。「名前を呼ぶ」ことと並んで、「名前を刻む」ということも、忘れてはならない出来事を想起させるという意味で、大切なことなのだ、と実感させられました。創世記のはじめの二つの章で、まずは神が、続いて人間が「名前を呼んだ」という記事は、きわめて重要なことです。

他方、日本の社会は、あまりにも名前を呼ぶことの少ない社会です。私の父親は母親を呼ぶときに、名前ではなく、「おい」で通していました。日本の社会では、先生とか、部長とか課長とか、社会的地位で呼びかけます。しかし、名前を呼ぶことによって、個人間の人間関係がつけられてゆきます。ですから、私は学生たちに、結婚しても、名前で呼び合うように、と勧めています。

創世記のはじめに「名前を呼ぶ」ということが繰り返されますが、それは決して偶然ではありません。このような、読み飛ばしてしまうようなことの中にも、大切なことが籠められているのです。聖書とは、そういう書物です。

## 父と母を見棄てる

最後にもう二つだけ申し上げたいと思います。その一つは、創世記二章二十四節です。「こういうわけで、人は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」という箇所です。女性がアダムの肋骨から造られて、ア

ダムの前に連れてこられると、彼はとても喜び、「これこそわが骨の骨、肉の肉である」と言います。「骨の骨」とか「肉の肉」とは、最も近い存在を表すヘブライ語的表現です。それに続き、「こういうわけで、人は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」という説明文が加えられています。イエスが離婚問答のときに引用する箇所です。

岩波委員会訳はこれを「このゆえに人はその父と母とを見棄てて、その妻と結び合う。彼らは一つの体となる」と訳しています。「父母を離れて」でなく、「父と母を見棄てて」です。ここに用いられたヘブライ語動詞アザブがそういう意味合いなのです。十字架上でイエスは「エリ・エリ・レマ・サバクタニ、わが神わが神、どうして私をお見棄てになるのですか」と叫ばれたと福音書は伝えます。詩篇の二十二篇一節からの引用ですね。サバクタニはアラム語ですが、ヘブライ語はアザブタニ、その動詞がアザブなのです。ですから、「離れる」ではなく「見棄てる」という意味です。

ルツ記にはこのアザブという動詞が「父と母」を目的語にとる一文がみられます。ルツ記二章二十四節です。邦訳はここでは「捨てる」と訳しますが、創世記の方は岩波委員会訳以外のすべての邦訳聖書が「父と母を離れて」と訳しています。そう訳す理由は想像できますね。もし、ここで「父と母を見棄てて」と訳しますと、聖書は最初から親不孝を教える書物なのか、と誤解されかねない。そこで、邦訳聖書の訳者は無意識に機制したのでしょうか。しかし、原文は「見棄てる」にあたる強い意味の動詞を用いています。それによって、夫婦の関係は親子の関係に勝る、という社会観をここに言い表しているのではないのでしょうか。岩波委員会訳には「夫と妻の関係は親子のそれにまさるということ」という簡単な注が付されています。そう理解しますと、当然、「あなたの父と母を敬え」という十戒のなかの戒めとの関係が問題になります。そこから旧約聖書の立体的な思想の探求がはじまることになりましょう。

「夫と妻の関係は親子のそれにまさる」とは、別の言い方をすれば、人間社会の最も基本的な単位は夫と妻の関係である、夫と妻の関係が社会の基礎になる、ということでしょう。現代は結婚や離婚が軽く考えられるようになりました。その犠牲になるのが、子供たちです。いがみ合う両親の間で、子供たちは自分自身の存在を肯定的に受け止められなく

なってしまいます。そうであればこそ、聖書のこのメッセージはしっかりと心にとめておかなければならない、と私は思うのです。

### あなたが私に与えてくださった妻が

もっとも、エデンの園の物語は、そのような夫と妻の関係にほころびが生じるさまも書き留めています。蛇の誘惑を受けて、禁じられた「善悪を知る木」から実を取って食べてしまうからです。

この場面は、これまで女が蛇に誘惑されて、禁じられていた木の実に手を伸ばしたという面だけが注目されてきました。しかし、アダムも「一緒にいた」と記されています。つまり、「わが骨の骨、わが肉の肉」とまで言った妻が蛇から誘惑されているときに、アダムはその場にいたことになります。しかし、彼は何も発言していません。そのとき、彼がどのような反応を見せたのか、聖書本文は記すことなく、読者の想像力に任せています。

その点で、システィーナ礼拝堂の天井画は示唆的です。ミケランジェロはそこに、禁じられた木に手を伸ばすアダムの姿を描きました。彼自身がエバの頭越しに実を取ろうとしているのです。ミケランジェロは、アダム自身が実を取って食べようとしていた、と沈黙する聖書本文から読み取ったのです。この時期、デューラー、クラナハ、ティツィアーノなど、他の画家たちも競うようにして、この場面を様々に描いています。ご覧になって比べてみてください。ミケランジェロの独創性がわかると思います。

ともあれ、蛇に誘惑されて禁じられた実を食べた二人は、神の歩む音を耳にして木立の中に隠れます。そこで、神は彼らが禁断の実を食べたことを察知し、まずはアダムを追求します。すると、アダムは、「あなたが私と共にいるようにしてくださった妻が私に与えてくれたので、食べてしまった」と弁解します。責任転嫁ですね。妻もまた、いや蛇に騙されたのです、と言い逃れようとします。このやりとりは、私たち人間の現実の姿を描き出しているかのようです。

私自身、結婚生活三十五年になりますけれど、アダムと同様、妻に多くの責任を押し付けてきたものだ、と思います。とくに子供の教育に関

して、しばしば、家にいる妻に責任を転嫁しておりました。エデンの園の物語は、原初の人類の物語ですけど、そこに人間の姿が描き出されていることを思われます。

## あなたは夫を求め

責任転嫁は、夫と妻の間にほころびを生じさせずにはおきません。それに対して、蛇、妻、アダムの順で、神は厳しい言葉を告げます。その中で、妻エバに対する言葉は注意が必要です。三章十六節ですが、文語訳が「我、おおいに汝の孕みの苦しみを増すべし。汝は苦しみて子を産まん。また汝は夫を慕い、彼は汝を治めん」と訳した箇所です。この箇所を新共同訳は「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する」と訳してしまいました。伝統的に「夫」と訳されている語が「男」と訳されています。しかも、原文は単数形で「あなたの」という接尾代名詞がついています。それを「お前は男を求め」と訳することによって、女性は不特定多数の男を追い求める、と読めるような訳文にしまいました。つまり、女は蛇に騙されて、あの木の実をとって食べ、男にも食べさせたために、その罰として、男とあらば、見境なくそのあとを追いかけていく、そういう存在になる、と神が語ったかのようです。

新共同訳のこの箇所で、もう一つの問題は「はらみの痛み」という訳です。文語訳でも「はらみ」という訳語が用いられていますが、今日では「はらむ」といった動詞も「はらみ」といった単語も、ふつう、人間には使いません。結婚した若いご夫婦に赤ちゃんが与えられたとき、妻がはらんだ、などとは言いませんね。どうしてこのような訳になってしまったのでしょうか。この新共同訳の聖書を訳す訳者の中に、女性がいなかったからではありませんか。女性がいたら、「はらみの痛み」といった訳語に疑問が呈されたはずです。「男を求め」という訳も再考されたにちがひありません。それは、聖書翻訳にも女性の視点が必要であることを教えてくれます。

いずれにせよ、ここでもまた神は、夫と妻とからなる夫婦の関係が重要であることを告げています。禁断の木の実を食べたアダムは妻に責任

転嫁をし、両者の関係にほころびが生じますが、妻の側からそのほころびが繕われてゆくことを神のこの言葉は告げているのではないか。私にはそう思われてなりません。

## カインの末裔、「神の子たち」、ノアの家族

かくしてエデンの園を追放されたアダムとエバはエデンの東に住みますが、カインとアベルの二人の男児が与えられました。しかし、この二人の間に殺害事件が起こります。弟アベルを兄カインが殺害するのですね。そのカインの末裔がレメクでした。「カインの末裔」と聞きますと、有島武郎の小説を思い起こす方もおられましょう。有島は「カインの末裔」という表現を内村鑑三から聞いたはずです。それを彼は、当地北海道の開拓時代の荒々しい男を描いた作品に用いたのです。それ以上、そのことには触れませんが、有島は「カインの末裔」によってレメクを念頭においていたかもしれません。

そのレメクは「二人の妻をめとった」といいます。一人の夫と一人の妻からなる夫婦が人間社会の基本的単位であったはずですが、ここでそれが逸脱しはじめたのです。その後に五章の「アダムの系譜」が綴られますが、第六章から九章までが洪水物語となります。その冒頭、第六章一節から四節には、奇妙な話が伝えられています。「神の子たち」が人の娘の美しいのを見て、それぞれ好むままに人の娘を妻にめとり、その娘たちに生ませたのがネフィリムと呼ばれる昔の英雄である、ということです。この短い挿話は、旧約聖書中、解釈の最も難しい箇所の一つです。背後には、天使と人間の結婚などの神話素材が想定されますが、正確なところはほとんど分かっていません。

しかし、その後には、神が地上を見ると、地上は人間の悪で満ちていたので、神は人間を造ったことを後悔し、洪水を起こす決断をした、と続きます。しかし、人間がどのような悪を犯していたのかは明言されません。そのために、「神の子たち」の行為が「洪水前夜」の地上の状況を示していると理解されます。つまり、人間の社会に悪が蔓延した、その事例として「神の子たち」が好むままに人間の娘たちを妻にめとっていた、と記されているようです。しかも、「神の子たち」とは、一方で、天

使たちとも考えられますが、他方で、王が「神の子」とみなされていたのです。

サムエル記下七章一四節によれば、神はダビデの腰から生まれる者、すなわちダビデの王位を継ぐ子孫について「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と告げています。詩篇第二篇は王の即位式の歌と見られますが、そこでも神が即位する王のことを「今日、わたしはお前を生んだ」と宣言するのです。これらの箇所は、ダビデの王座に就く者が「神の子」と理解されていたことを示しています。加えて、「神の子たち」が人間の美しい娘たちを好むままに妻にしたという記事は、七百人の妻と三百人の側女を抱えていたというソロモン王のことを思い起こさせるかもしれません。あのバト・シェバ事件なども、権力を手にした者が自分の好む女性を妻にするという事例の一つに数えられましょう。

このように、男女からなる人間社会という視点から原初史の物語を読み継ぎますと、アダムとエバという一人の夫と一人の妻からはじまった人類の社会は、カインの末裔の時代には二人妻となり、洪水前夜には「神の子たち」が好むままに人の娘をめとるようになったことが分かります。

そうした中で、ノアが登場します。ノアは義人であった、と記されますが、彼がどのように義しかったのか、ということはわからないままです。しかし、ノアは一人の妻と結婚していました。ノアの「妻」が単数で記される点にこれは伺われます。そして、三人の息子たちも一夫一妻でした。創世記七章十三節にそれが明示されます。残念なことは、新共同訳はこれを「ノアも、息子のセム、ハム、ヤフェト、ノアの妻、この三人の息子の嫁たちも」と訳しましたが、この訳には二つの不適切な点があります。一つは、ノアの息子たちの「妻」を「嫁」と訳したことです。原文には「妻」と明記されています。もう一つは「三人」が息子の数なのか、「妻」の数なのか、あいまいにしたことです。原文は「三人」が「妻」の数であることを、つまりは、ノアの息子たちがそれぞれ一人の妻と結婚していたことを、明示した文章なのです。要するに物語は、ノアとその家族が一夫一妻であったことを強調しているのです。そして、その家族から洪水後の人類がふたたび地上に広がることになります。

以上、人類太古の物語を中心に、人間と自然の関係について、また人



間観や人間社会について、お話をさせていただきました。物語は素朴ですが、その素朴さの中に自然や人間や社会の問題がしっかりと視野に入っている、ということはお分かりいただけたのではないのでしょうか。バベルの塔の物語は、人間の文明の問題を正面から見据えています。それについては、お話しする時間がなくなりましたが、以上に申し上げたことが、みなさまが旧約聖書を学ばれるうえで、多少とも参考になれば、幸いです。長時間にわたるご清聴、ありがとうございました。

(付記：本稿は2015年9月18日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演会を文章化したものです。)